資料４

里山とは

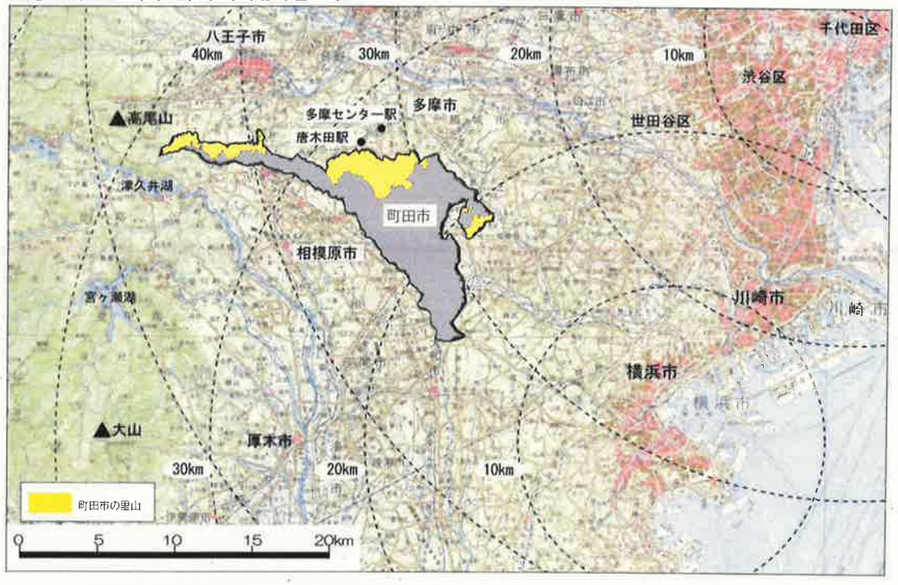
谷戸や山林に隣接する集落で生活する住民が自ら田畑を耕作し、農閑期においては薪や炭にする目的で雑木林の樹木の伐採を行い管理を行ってきた地域を指します。里山は人の手が適度に入ることで生き物の多様性、良好な景観、伝統文化等が保全・継承され、人と自然が共生することで持続可能な環境が維持されてきた場所です。地域の人々が里山の様々な資源を活用（生産・加工・販売）することで、地域の資源・経済が循環し、里山の環境が維持されてきました。

1　町田市内の里山環境

（1）位置

対象区域となる町田市の里山は、東京都心から直線距離でおよそ 30～40km、横浜の中心部から直線距離でおよそ 20～40km の位置にあります。町丁目では、相原町、上小山田町、下小山田町、小野路町、図師町、野津田町、三輪町の各一部に該当します。

■町田市の里山の位置図(黄色塗)



（2）人口・世帯等

町田市の里山は、小野路町、上小山田町、下小山田町、図師町、野津田町、相原町、三輪町の各一部からなっており、現在（2021 年４月１日）の各町丁目の人口及び世帯数の合計は 52,560 人、23,686 世帯となっています。

町田市の里山の大半を占める市街化調整区域内の居住者は少なくなっています。また、町丁目別の高齢者（65 歳以上）の割合は、年々増加傾向にあります。

■各町丁目の人口および世帯数

	世帯数（世帯）	人口（人）	男（人）	女（人）
小野路町	1,987	3,716	1,907	1,809
上小山田町	1,801	4,686	2,351	2,335
下小山田町	1,789	3,864	1,904	1,960
図師町	3,596	8,308	4,173	4,135
野津田町	4,253	10,421	5,141	5,280
相原町	7,056	14,927	7,243	7,684
三輪町	3,204	6,638	3,509	3,129
合計	23,686	52,560	26,228	26,332

（3）特徴

町田市の里山は、都市基盤の整った市街地が間近にある中で、豊かな緑に恵まれ、今でも農の環境が維持・継承されており、数多くの歴史・文化の足跡も見ることができます。こうした立地・農・水・歴史・文化はすべて町田市の里山の特徴といえます。

○広域的な緑のネットワークの一翼を担う大緑地帯
○大都市直近にあり、多摩丘陵の原風景を色濃く残す希有な地域
○生物の生息・繁殖環境として恵まれた環境が一部に残されている
○中世から現代まで、町田市の歴史・文化の足跡が蓄積されている
○減少しつつあるものの、現在でも農の環境が維持・継承されている
○フットパスの取組や湧水・里山の環境を再生・保全する活動が行われている

（4）現状と課題

かつて里山が適切に維持・管理されていた町田市の里山は、産業構造の変化や地域住民の高齢化などにより人と自然の循環のサイクルが失われ、放置され荒廃した山林が増え、大きく環境が変化しました。このことで、里山の生態系や景観が維持・保全されなくなるだけでなく、ゴミの不法投棄等による環境の悪化や自然災害の発生も懸念されています。

地域の暮らしの在り方に密接な関わりがある里山環境を将来に渡り持続可能なものとしていくためには、こうした課題に対して行政だけでなく、多様な主体による取組みが求められています。市民、行政、民間事業者等が協働し、これからの時代に即した持続可能な里山環境の在り方を検討、実践していくことが重要です。

（５）町田市の里山での活動の様子

谷戸の風景

たけのこ堀り

四季彩の森　芋ほり

冬の奈良ばい谷戸

奈良ばい谷戸の稲刈り

樹木の伐採

２　国等の動向

町田市の里山の課題解決につながる制度や取組として以下が考えられます。

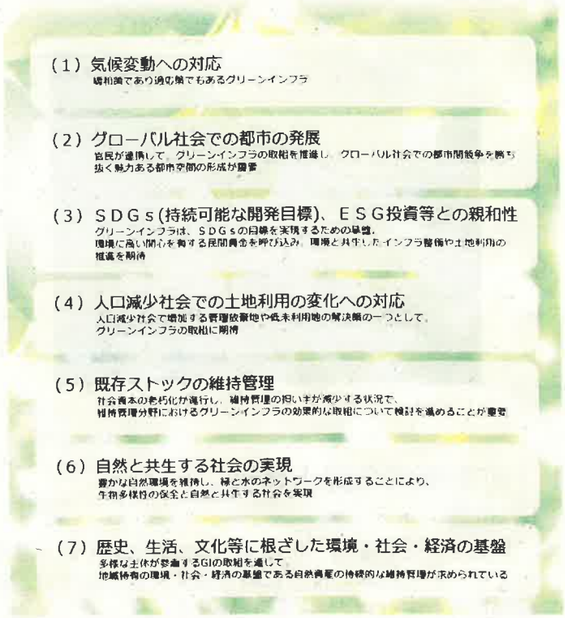
（１）グリーンインフラの取組

グリーンインフラとは、社会資本整備や土地利用等のハード・ソフト両面において、自然環境が有する多様な機能を活用し、持続可能で魅力ある国土・都市・地域づくりを進める取組です。

様々な社会的課題、経済的課題の解決方法の一つとしてグリーンインフラの活用が期待されています。グリーンインフラを活用することで、以下の成果が期待されています。

グリーンインフラとは

グリーンインフラの活用により期待される成果



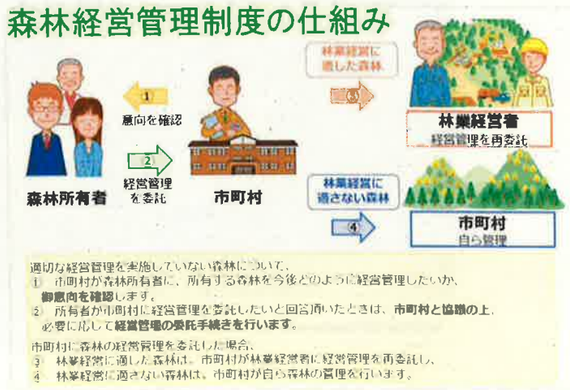
（２）森林環境税及び森林環境譲与税

パリ協定の枠組みの下における日本の温室効果ガス排出削減目標の達成や災害防止を図るため、森林整備等に必要な地方財源を安定的に確保する観点から創設された制度です。森林環境税は、令和６年度から国内に住所を有する個人に対して課税される国税であり、市区町村において、個人住民税均等割と併せて一人年額千円が課税されます。その税収は、全額が森林環境譲与税として都道府県・市区町村へ譲与されます。

町田市の里山環境を持続可能なものとしていくためには、荒廃の原因となっている、竹や巨木化した樹木を間伐し、山林の再生を図っていくことが重要といえます。

（３）森林経営管理制度

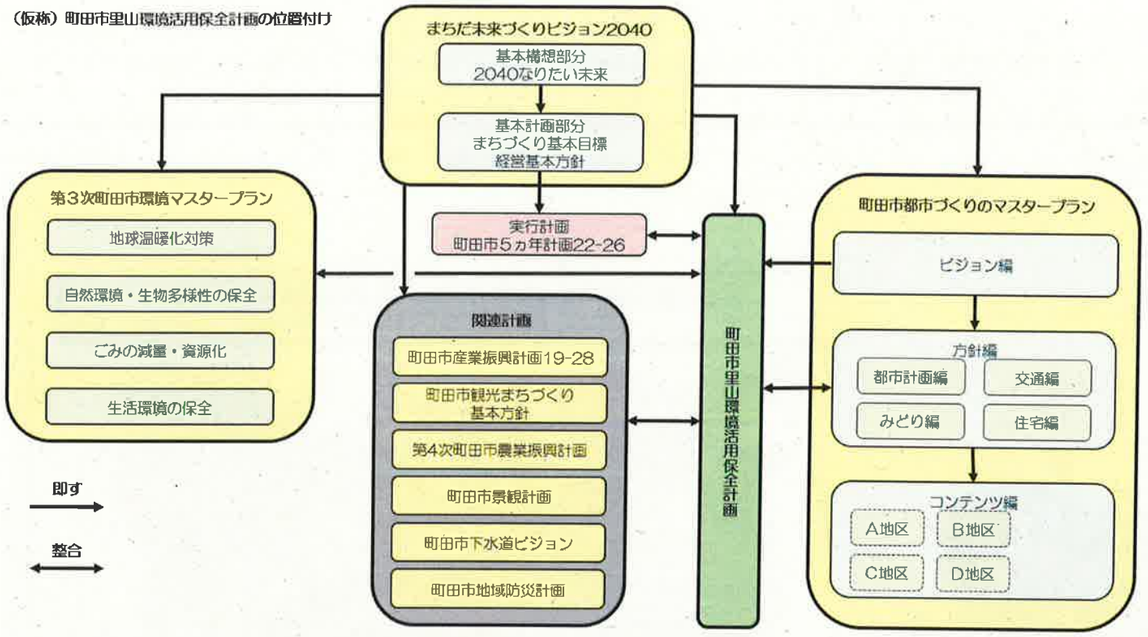
経営管理が行われていない森林を市町村が仲介役となり森林所有者と民間事業者をつなぐことで適切な経営管理を行う林野庁の制度です。当制度を活用することにより、「１．放置された森林が経済ベースで活用され、地域の活性化につながる効果」「２．森林の多面的機能が向上し、土砂災害等の発生リスクが低減され、地域住民の安全・安心につながる効果」などが期待されます。



３　関連する市の計画

（１）計画の位置づけ

「(仮称）まちだ未来づくりビジョン 2040」及び「(仮称）町田市都市づくりのマスタープラン（全体ビジョン編)」を受け、里山環境の活用・保全を推進するための実行計画とします。

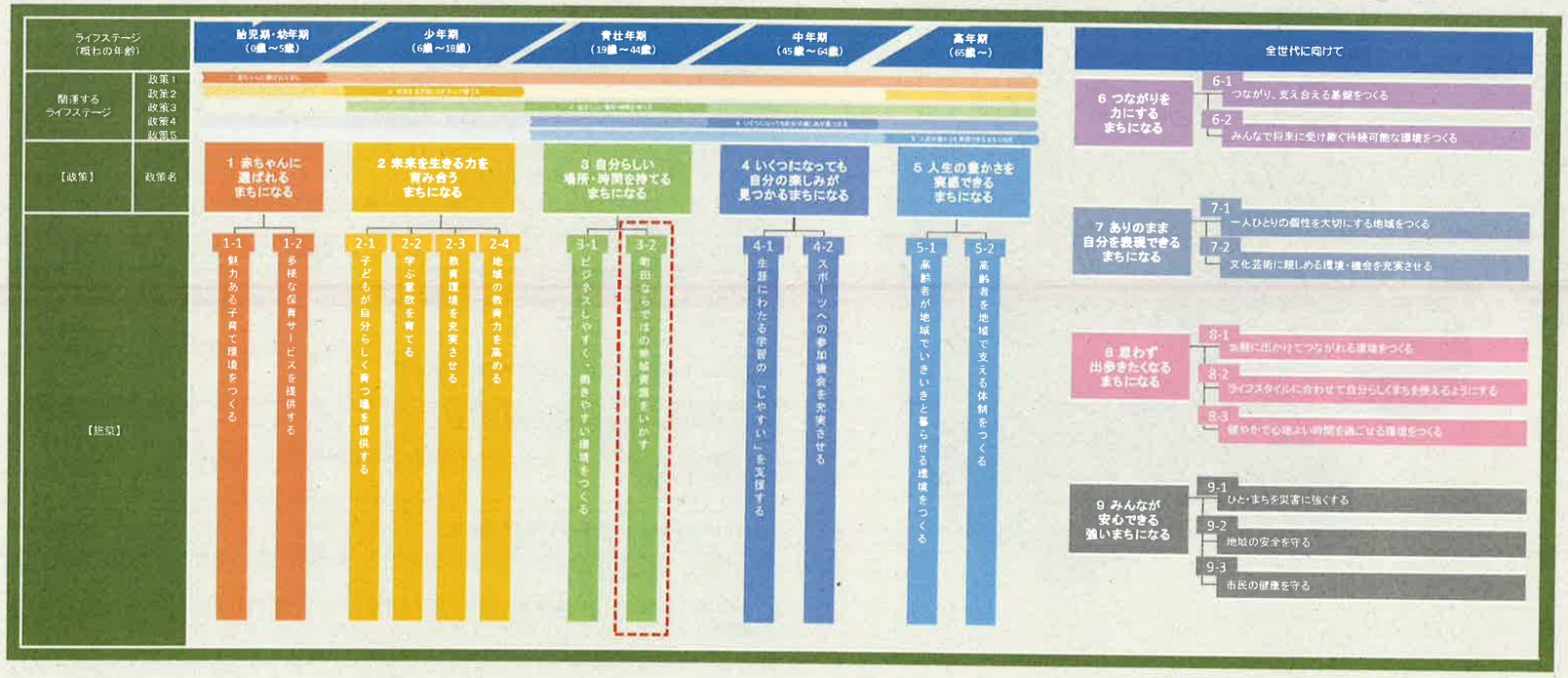


（２）まちだ未来づくりビジョン

「(仮称）まちだ未来づくりビジョン 2040」は、市民や地域団体、市内事業者など町田市に関わるすべての方々が、共に実現を目指していくビジョンとし、その実現に協力していただける人から新たに関わりを持っていただける人まで、多くの方を惹きつける魅力的なビジョンとして策定します。

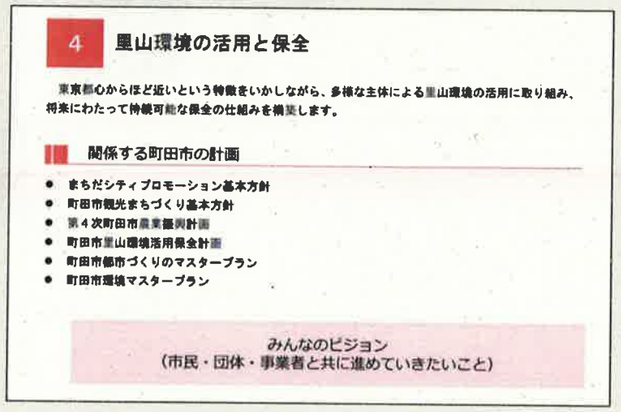
基本構想部分を担う「(仮称）2040 なりたい未来」と基本計画部分を担う「(仮称）まちづくり基本目標」及び「(仮称）経営基本方針」で構成されます。また、ビジョンの実現に向けて、具体的な事業と取組を示す実行計画（５ヵ年計画）を策定します。

①まちだ未来づくりビジョンの計画体系とまちづくり基本目標



②なりたい姿の実現に向けた施策推進の方向

「施策３-２町田ならではの地域資源をいかす」において、施策推進の方向性として「里山環境の活用と保全」が示されています。



（３）町田市都市づくりのマスタープラン

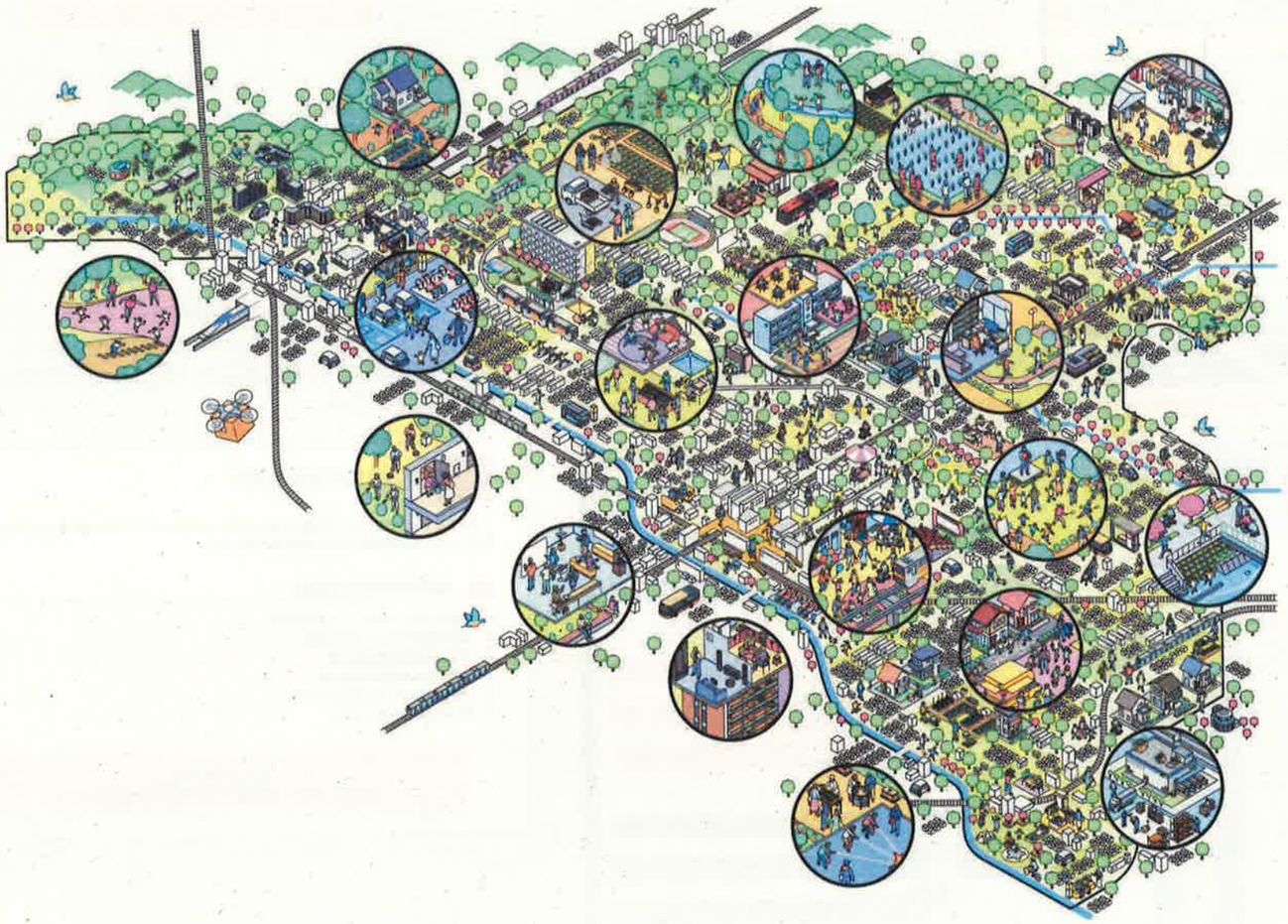
町田市では現在、次の 20 年の都市づくりの方向性を示す「(仮称)町田市都市づくりのマスタープラン(2022 年４月～)」の策定に向けた検討を進めています。

人口減少社会の到来や多摩都市モノレールを中心とした大規模交通基盤を町田市に迎えるにあたり、分野横断的に新たな将来都市構造を設計し、共通した施策を展開していく必要があることから、各分野を統合して「(仮称) 町田市都市づくりのマスタープラン」として策定することとしています。

これからの町田市の都市づくりでは「都心のベットタウンではない、町田ならではの魅力ある暮らしが楽しめるまちへ」という考え方が検討されています。

出典：(仮称) 町田市都市づくりのマスタープラン」策定に関する特別委員会 中間とりまとめ（案）

①2040 年の暮らしとまちのビジョン



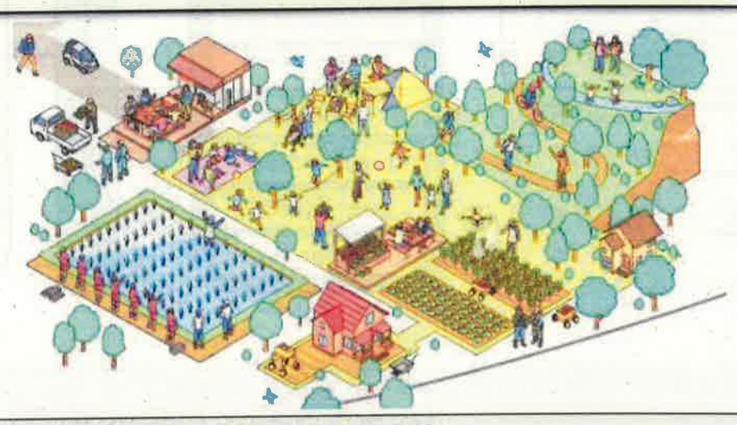
②みどり空間活用ビジョン

未来づくりビジョンおよび都市づくりのマスタープランを受け、市内の多種多様なみどり空間の具体的な活用方策を検討しています。

市内には郊外らしい豊かなみどりが存在するが、市民等が活用しやすい環境や仕組みになっていないことから、まちなかの多様なみどりを一元的に捉え、市民等が主体となりみどり空間を活用し、新たな暮らしを実現できるとともに、緑が健全な状態で保全されるような、みどりと暮らしの関係をつくります。

みどりや農との関わりを日常の一部にしながらココロとカラダを育む暮らし

主な地域の例：市街化されていない丘陵地とその周辺



『里山の農やみどりがもっと身近で馴染みあるものになる』

○歴史風土が守り引き継がれた里山の農やみどり、水辺など、象徴的な風景が身近にある生活がみんなにとって馴染みある暮らしと感じられている。

○市内各所から小中学生が集まり、田植え・稲刈り・炭焼きなど、里山の環境を活かした体験ができ、町田ならではの学びの場で子どもたちの心と体が健やかに成長する。

『農やみどりに関わりたい人の思いが実現する』

○援農ボランティアや市民農園で汗を流したり、農業研修で学んだ技術を新規就農者として活かすなど、さまざまな形で農に関わりたいという思いが実現されている。

○地元野菜が地域内のレストランや小売店舗などで手に入ったり、農を通して生産者とふれあうなど、地元野菜とのつながりが健康的な暮らしにつながっている。

○間伐材を利用した木材加工品の制作や地域の木材等を利用したイベントに参加することで地元の木のぬくもりを感じている。

『地元のみどりの中でココロとカラダが健康になれる』

○自然環境を活かしたスポーツやレジャーを楽しむことができるフィールドがつくられるなど、さまざまな目的にあわせてみどりに関わる人が増えている。

○民家を再利用した仕事の場がつくられ、みどりを間近に感じながら気持ちよく健康的に働くことができる機会が増えている。

『農やみどりに包まれた環境で住み続けられる』

○地元で暮らしてきた人たちが、新たに住まう人たちとともに、地域資源を有効に活用しながら、地元への愛着を持って住み続けている。

○「地域の農やみどりを守る」「歴史や文化を次世代に引き継ぐ」という思いを持った人が地元に住みながら活動している。

４　町田市里山環境活用保全市場調査の結果

【在住者、来訪者向け意識調査の要点】

※網掛け：グラフ・表を参照

■調査概要

	調査方法	対象	回収数
①地域住民のニーズに関するアンケート調査	各世帯２通、ポスティングによる配布・郵送回収	上小山田町エリア、下小山田町エリア、小野路町エリア各 1,000 名、計 3,000 名	1,363
②来訪者のニーズに関するアンケート調査	直接配布・郵送回収	小山田緑地来訪者、小野路宿里山交流館の来館者 計 200 名程度	165

■調査結果の要点

・小山田・小野路エリアが都内の里山として貴重な場所となっていることを**「知っていた」住民は 65.7%**。年代別にみると**30 歳代以下は「知らなかった」が多く**、40 歳以上で「知っていた」が多くなっている。

・まちだの里山が今後も貴重な場所としてあるために「**里山環境の活用と都市基盤の整備を並行して進めた方がよい**」が**46.1%**と　最も多く、次いで「今ある都市基盤を利用し、里山環境の活用を積極的に進めた方がよい」が 27.5%

・**北部丘陵以外の**エリアの**人や団体が参画**することについて「**賛成**」「やや賛成」が合わせて **73.3%**

・里山に対する関心や行動の状況について「里山の保全や活用に関心があるが、すぐには取組を行いたいと思っていない」が 30.5%と最も多く、次いで「里山での活動のことをよく知らないが、なんらかの取組に関わりたいと思っている」が 22.9%、「**里山のことを知らない。どのような取組にも関わる予定はない**」が **18.7%**

・町田市の里山の現状について知っていることは「**農業従事者などが高齢化している**」が **53.3%**と最も多く、次いで「多摩丘陵の原風景が残った貴重な場所である」が 49.7%、「多様な生物が生息する貴重な環境である」が 45.1%となっている。

・年代別にみると **40 歳代以下**で「**多様な生物が生息する貴重な環境である**」が最も多く、50 歳代以上で「農業従事者などが高齢化している」が最も多くなっている。

・町田市の里山は今後どのような場所になるとよいと思うかについて「**多様な生物が生息できる環境が保全されている場所**」が **50.6%と最も多く**、次いで「自然の中で子どもが安心して遊べる場所」が 40.3%、「多摩丘陵の原風景、昔からの生活文化が残されている場所」が 39.3%

・里山での取組に**関わる人が増える**ようにするには「**散策等が楽しめる環境の整備、活用方策を強化する**」が 39.9%と最も多く、次いで「取組を始める人を市が支援する」が 30.4%、「農産物の直売所の開設・運営支援を強化する」が 27.6%

・【来訪者】まちだの里山は「多摩丘陵の原風景が残った貴重な場所である」と認識している人が最も多く 72.1%

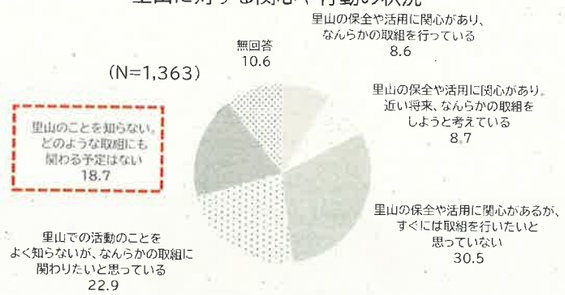
・【来訪者】里山に対する関心や行動の状況について**「地域の住民・団体の活動をよく知らないが、なんらかの活動に関わりたいと思っている」人が最も多く 33.9%**

里山が貴重な場所だと知っているか

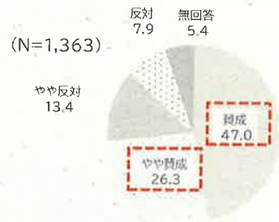
		問6 小山田・小野路エリアが都内の里山として貴重な場所となっていることについて、ご存じでしたか？(○は1つ)			
		合計	知っていた	知らなかった	無回答
問2 あなたの年齢は？(○は1つ)	全体	1,363 100.0	896 65.7	447 32.8	20 1.5
	18～29歳	49 100.0	19 38.8	30 61.2	- -
	30～39歳	118 100.0	50 42.4	66 55.9	2 1.7
	40～49歳	224 100.0	137 61.2	84 37.5	3 1.3
	50～59歳	244 100.0	165 67.6	79 32.4	- -
	60～69歳	328 100.0	242 73.8	85 25.9	1 0.3
	70歳以上	395 100.0	283 71.6	102 25.8	10 2.5

里山が今後も貴重な場所としてあるため

里山に対する関心や行動の状況



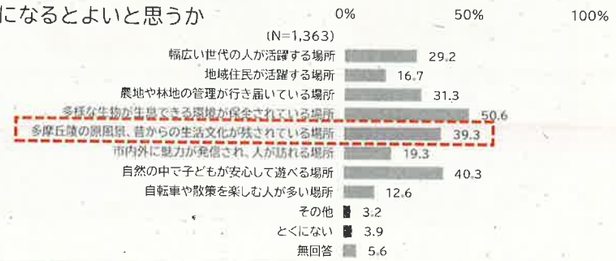
外のエリアの人や団体が参画することについて



町田市の里山の現状について知っていること

		問10 町田市の里山の現状について知っていることは以下のうちどれですか？(○は3つまで)												
		合計	1. 農業従事者などが高齢化している	2. 耕作放棄地・管理放棄林が増加している	3. 多様な生物が生息する貴重な環境である	4. 多摩丘陵の原風景が残った貴重な場所である	5. 市内外に熱心なファンがいる	6. 自転車や散策で訪れる人が増えている	7. 市内でも一部にしか魅力が知られていない	8. 里山に興味をもつ若い人・家族が増えている	9. 里山を活性化する・保全する活動団体や人たちがいる	10. その他	11. とくにない	無回答
問2 あなたの年齢は？(○は1つ)	全体	1,358 100.0	724 53.3	450 33.1	612 45.1	675 49.7	68 5.0	275 20.3	185 13.6	56 4.1	175 12.9	33 2.4	106 7.8	72 5.3
	18～29歳	49 100.0	20 40.8	7 14.3	21 42.9	7 14.3	1 2.0	5 10.2	4 8.2	2 4.1	4 8.2	2 4.1	15 30.6	1 2.0
	30～39歳	118 100.0	47 39.8	26 22.0	52 44.1	43 36.4	8 6.8	33 28.0	16 13.6	5 4.2	11 9.3	4 3.4	18 15.3	6 5.1
	40～49歳	224 100.0	99 44.2	60 26.8	105 46.9	91 40.6	11 4.9	57 25.4	34 15.2	10 4.5	32 14.3	6 2.7	25 11.2	11 4.9
	50～59歳	244 100.0	134 54.9	76 31.1	133 54.5	127 52.0	16 6.6	60 24.6	36 14.8	11 4.5	45 18.4	3 1.2	12 4.9	8 3.3
	60～69歳	328 100.0	194 59.1	129 39.3	149 45.4	186 56.7	12 3.7	68 20.7	40 12.2	10 3.0	43 13.1	8 2.4	10 3.0	14 4.3
	70歳以上	395 100.0	230 58.2	152 38.5	152 38.5	221 55.9	20 5.1	52 13.2	55 13.9	18 4.6	40 10.1	10 2.5	26 6.6	32 8.1

今後どのような場所になるとよいと思うか



【企業等向けヒアリング調査の概要】

民間事業者等を対象として、対象地への関心の有無や事業展開等に関する意向を把握することで民間活力導入に向けた検討のための基礎情報を得ることを目的とした。

調査の流れ

	一次調査		二次調査
ねらい	幅広い業種の民間事業者等を対象として、関心の有無や意向を把握する。	▶	一次調査により選定した概ね５者について、必要な項目を聞き取る。
方法	E-mail によるアンケート調査（30 者）		対面によるヒアリング

【要点】

・地域の方々や主体となって取り組みたいという事業者と**連携**して**地域おこし**や**イベント**の実施をしてみたい。
・地域の農家と連携した**６次産業化**は短期的に実現可能であり、実施したい。**産官学連携**も視野にいれたい。
・例えば町田駅前の飲食店に里山の方を招き、里山の魅力を**発信**する**場や機会**の提供ができる。
・小さな道の駅（売店）のような物産品の販売**拠点の整備**、ワーケーション施設の整備ができるとよい。
・子どもが里山環境を楽しむ機会を充実していけるとよい。

５　まちだの里山の将来像

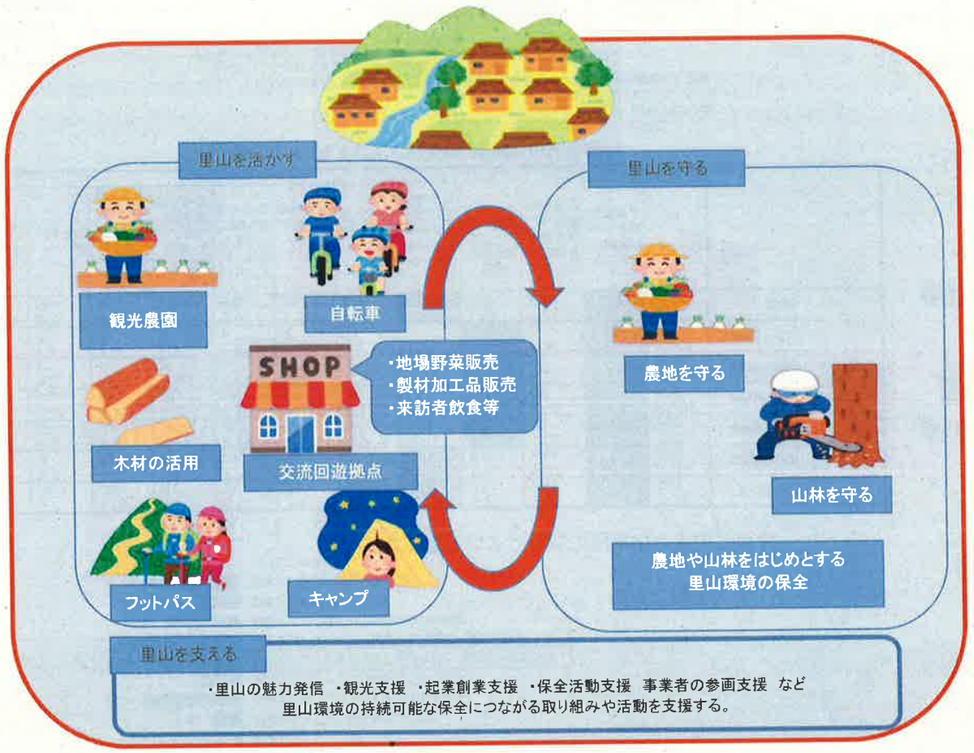
かつて地域の人々が里山の資源を活用することで維持されてきた環境は、産業構造の変化や地域住民の高齢化などにより人と自然の循環のサイクルが失われ、大きく変化しました。

前述の市場調査の結果や里山環境をめぐる動向等をふまえると、今後は多様な主体による里山環境の活用・保全を推進し、持続可能な新たな循環のサイクルを構築していくことが重要といえます。

次期計画では、里山環境を継続して活用し、その取組みを里山環境の保全につなげることで、里山環境を持続可能なものとする新たな循環サイクルを構築することを将来像に掲げるものとします。

将来像のキャッチコピー（案）

みんなで活かし、守り支える、まちだの里山



活かす	里山の環境を利用して事業を行うこと。 農業、観光農園、レクリエーションなどの事業を行うこと。
守　る	山林や里山環境の回復や保全に取り組むこと。
支える	里山の保全や事業を行う人たちを支援すること。

【将来像】

みんなで活かし、守り支える、まちだの里山

【循環サイクルを再構築するために必要なこと】

認知度を向上させる

・在住者の３割以上の人が、町田の里山が貴重な場所ということを知らない
・来訪者は里山に関心はあるが、地域の住民・団体の活動をよく知らない
・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、知る機会を充実できていない
・町田市の里山をＰＲする場があるが十分に活用できていない

実際に現地を訪れる人を増やす

・在住者は北部丘陵以外のエリアの人や団体が参画することについて賛成している人が多い
・交流・回遊の拠点となる機能や場所が求められている
・里山を散策しやすくなるよう、環境のさらなる充実が求められている
・現地を訪れたくなるきっかけづくりが求められている

事業者等と連携して里山を活用する

・在住者は里山を持続的な環境としていくために、様々な方法で活用していくことが重要だと感じている
・地域資源を活用して地域おこしやイベント等を実施したいと考える事業者が市内外にいる
・市内の事業者が連携して事業を行う具体的なアイディアが出てきている

満足度の高い暮らしを実現する

・在住者は地産地消の推進など、生産地であることを活かしていけるとよいと考えている
・在住者は地域を活性化し人の目が入ることで不法投棄を抑止していけるとよいと感じている
・在住者は地域のコミュニケーションの機会を充実できるとよいと考えている

６　（仮称）町田市里山環境活用保全計画の施策体系（案）

将来像　みんなで活かし、守り支える、まちだの里山

推進事業（イメージ）

基本施策1　まちだの里山を知る

■取組の方向性（イメージ）

1　市内在住の子どもたちがまちだの里山を知っているようにする
2　市内在住の大人たちがまちだの里山を知っているようにする
3　首都圏在住がまちだの里山を知っているようにする

推進事業１－１－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
推進事業１－２－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
推進事業１－３－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲

基本施策2　まちだの里山を訪れる

■取組の方向性（イメージ）

1　市内在住者がまちだの里山を訪れるようにする
2　首都圏在住者がまちだの里山を訪れるようにする
3　日本中、世界中の人がまちだの里山を訪れるようにする

推進事業２－１－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
推進事業２－２－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
推進事業２－３－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲

基本施策3　まちだの里山で働く

■取組の方向性（イメージ）

1　まちだの里山で農林業に従事できるようにする
2　まちだの里山で商業・サービス業に従事できるようにする
3　まちだの里山でちょっと稼げるようにする

推進事業３－１－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
推進事業３－２－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
推進事業３－３－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲

基本施策4　まちだの里山に暮らす

■取組の方向性（イメージ）

1　まちだの里山に住み続けたいと思われるようにする
2　週末はまちだの里山で暮らしたいと思われるようにする
3　まちだの里山に移住したいと思われるようにする

推進事業４－１－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
推進事業４－２－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
推進事業４－３－●　▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲